天正
漫游 武太郎ものがたり 後編

へ遠14
2503
ム-2

遠
2503
2-2

異國漫遊 瓜太郎物語後編

東京 岡本昆石戯作

急進國

身を畜つて危險に臨み九死を出て一生を得る者古今の例數あからねど。彼玉を懷て罪あるといふは〻〻。瓜太郎ハ文盲國みて己が有物でもなき浮舟を曳寄て打乗らんと。いらぎることよりゝ悞つて圖らずも大鯨に呑れしが。其より程經ちて濱邊の水ゐきに吐出され。夢の如き心地してありしが。暫時あり て我に蘇れども。鯨の腹内なる間身體痿て知覚を失ひしが為に。何日何時間呑れ居たるやを知らず。今

無難這所る吐れたるこそ偏る玉藻前の擁護る因るなるべし。噫有難きことなりと。先濡れたる衣裳を脱ぎて絞り乾ゝ〜あゞら西下の形勢を眺るふ。箇ハ抑什麼市街の花美なる僉練屋とかいふ物を以て家屋を建て。石橋を架け鐵橋を鉤り。馬車ハ縦横る馳り。電線ハ空中る靉靆く等。打て変り〜ふ驚き。瓜太郎ハ心裡ふ思ふやう。今俺這濱る吐れて前の文盲國の内あると想ひしふ。斯ハまた外國る來たことあらんと。呆氣る取られて立在る所へ廿歳可の書生ら〜き者通り掛り〜を好機會と。此地の名を原ねたるるそその人の言語英語る似て英語でも無く。佛語るまぎらす〜〜て佛語るもあらも。蘭語も獨語も混合雑乱話を當人をつゝりハ得意の容子で喃れども。半間の節ふて些とも解らを。了得の瓜太郎大る困り。滝聞く公冶長の耳ハ雀の語きへ聞解たりと。況や人間の言語の解らぬ筈あらねど斯ハ混合語ふて發音る誤りあるる相違あし。那西洋人を来と云ひ。土曜日を半どんと云ふ国あると欣聽たりき。當国の語も必ず倦る類ふうそあるめれと。心裏る察せ〜〜ば設今解らぬからと云つて他人る物を問あゞら禮を述べぬハ田舎士族の成果たるら知らを。全体無作法たることゝ思へむ。厚く謝して彼る別れ。聽てまた市街る到りて某家の者る問へ

で。這所ハ名ヨ負ふ急進國として宇内萬國の開明を聞くや否哉技術でも風俗でも。何でも彼でも速らヨこまを揉て最も器用ふ真似る土地なりと。得手ふ帆掛けた話をきいて。又手ハ好き国ヨ來りき。里諺ヨも名ハ躰を表すとやら云へバ。開明の進歩急ふして必定歐米人が貴重する自主の氣組も奮ふべし。自由の權も行はるべし。然む此こそ久々ふて息を吻くべき土地なり。嬉しや歡ばしやと思ふところへ西洋服を着て靴音高く來る者有り。只瞻れむ當国の官吏とも覚しく。両人孰れも右手ヨ洋杖を突き。左手ヨ髯を捻りながら風太郎ふ對て。何國の者ヨ

何して来れるぞやと問ふヨ。答へて俺ハ日本国の者なるが二年以前本國を発足して不自由国を遊歴し。又文盲国ヨ渡りて圖らむ大鯨ヨ呑れしが。その、ち日を経ること幾日ヨを知らむ。只今しがた這濱邊ヨ吐出さまて僥倖ヨ蘇生たると物語れむ。一人の官吏掌を拍て云ふやう。往昔存南亞といへる比不利の聖人ハ鯨ヨ呑れてその腹内ヨあること三日間の后恙なく濱辺ヨ吐れたりと古き歴史ヨ見えしが有。恁ことの有るべきとハ更々信ぜざりしヨ。今現在貴公がその二の舞をされしとハ寔ヨ九人の成し得難きことなり。餘談ハ后ヨて緩々承知はらん。先此方へ来

よと案内して寺院の如き所へ伴行れたるを接待委員ともいふべき官吏出来り。瓜太郎を打對て不慮の災難を逢ひ危きも命を別条無うしをて歡び思へり。見れば衣裳もまだ乾かぬ。春の寒季ハ殊更ふ堪らぬまでを。さこそと察し参らせなり。着替の衣裳を呈上さんと。清潔したる襦袢から上まで衣裳をとらひ受け。瓜太郎ハ感謝ふ堪ぬ。要時額ふ手を加て。貴殿方ちの恁く正首ふ管待られて。初對面なる心地ハせぬ。近年の人ハ勢利ふ走りて交友の間まら憂を救ふ者の得難きを。此國人の親切ふ近頃以て忝るしと式禮述てゐるうちふ。當國の紳士貴族ハ瓜太郎ふ譚を聽んと遐々ふ訪来り。聽て酒宴を展きそのの餘興ふとて音樂を奏じ。手躍を催ふ。夜ふ入てハ一筒五圓以上拾圓廿圓の煙花ふ。百筒も二百発も屁球の如くぽん〳〵と打揚るハ惜氣ふく。最花麗やうふ見ゆれども。斯浪費が下民の辛勞から出しかと思へば不覺ふ悲しくあり。瓜太郎ハ吻息をつき。噫吁歡樂を知て辛苦を知らぬ。富ふを知て貧きを知らざれば存るを知て亡ぶるを知らざるが如し。夫樂む者ハ樂むふ非ぬ殃を慮うふ在り。存する者ハ存するふ非ぬ亡ぶるらとを慮うふ在り。俺未だ當國の富るや貧きやを知らずと雖も。倘し現在の富裕ふ傲て斯る白

疾た歡樂をせで后来必ず貧きゐ至らん。又貧き
ゞ上ゐ斯をまることとあれど。禍殃弥々興りて終ゐ救
ふこと能はざるゐ至らん。なほ己ゞ痩世帯ゐ比較
て可惜〻〻頭痛を病しゞ。再熟々考へ見まで假令
這所ゐ何程の贅澤を盤〻幾何の浪費ゞ掛るも歡
樂こそあれ。己の賽布ゐ毛筋程の影響も無いこと
あれど。觀るハ豊樂賛るゐ志うぜと。不自由國以来習
ふ〻〻慣れた辯柔羅出任せゐ。當国人の火術ゐ巧
手あるらと日本の王屋鍵屋ハ遠く及ぶず。又音楽と
云ひ手躍と云ひ。伊太利人も三舎を避るべし。如恁開
明進歩の迅速あるらと宇内各國ゐ勝れて感服魂消

まを〻〻て。驚き入りたるあゞく。掻挑散〻賞賛せで並
居る紳士貴族等ハ然有で〻と云はぬもかり。傲慢
風ハ鼻の尖ゐ振下りて見えたるこそ浅猿き也。恁而
又この翌日よりハ毎日案内者を伴て諸大家学校等
ゐ到りて見まを。孰れも其建築ハ西洋の油画と一般。
遠方〻〻望む眺ハ恰も皆歐米風ゐ〻て煉瓦石造ゐ
見ゆ〻〻。近寄て熟々觀れで。扨羽目の陽部を洋漆
ゐて塗たる胡麻化し造最も多ゐ。愛想もなくそも盤
果て。猶其内部ゐ入て眺れで。教員生徒等僉西洋服を
着し。靴を穿き鬚を蓄〻たる風情。歐米人れ真赤な
贋物。鼈甲簪で云へバ馬爪の四方包。珊瑚珠で云ふ明

石鼈甲玉も及ばず。只異うく〜所ハ肌色の黄なると眼色毛色の黒いのと見倒し紙屑高ゐ捨賣〜ても半値位ハ引取きらゐ見ゆるとゞも。其談話の語句を聞けば漢も利うぬ序言あて満足ゐ洋語を学びたる者罕なる欠。少可り其文意を解得者ハ音節調はず。一二の會話を直似る者ハ復文意ゐ疎し。有然からゐ當國の者ゞ英佛等の語を吐ふも英佛人ゐも解らぬと云ふ一種異妙の混交語句ゐて嚮ゐ物問ひたる書生と同ドく物識貌して高慢ゐ喧〜、傍痛く。臭い者身の臭きを知らぬとハ此點なり此點ありと風太郎ハ右此耳から左の耳へ聽流しあぐら。尚彼方を覗き凭倒

まぬ椅ゐゐ永く腰打掛て脚を痛疼し立たり坐たりまゐる者あり。なをべき事務無く閑暇ゐ暦ぬて居眠を催し鼻孔ら提灯を出せ者あり。當国ま何の場所も其事務ゐ適しと人員の多きゞ故ゐ一日の事務を二日ゐ延し二日の事業を三日ゐ勤め。煙草ゐ醉て案ゐうつ寄辨當時を俟て噫をまる為体ハ氣の毒で見てもおられず。この學校ゐある教師等ハ毎日辞典と頸引仕たぐらゐ何成彼成横文を讀で其場のお茶を濁まと雖も竪の文ゐハ疎き者多く殊ゐ仮名遣を何でも宜として氣ゐ留る者あらぬバ横文字ゐ違を右や左う云へども。假名を間違ひ。遣分を混雑まるとゝ傍ゐ漢

字無くて、解難き文章多し。有然から又唐土の詩文を最迂遠ものとして其風韻をめつ者鮮けれど。韻字平仄も辨へぬ者十中の七八あらん。有恁者より教へらるゝ生徒ゐ生物識の中ぶらり多きも有理と云ふべし。女生徒等ハ又何の為やら皆襠高馬乗袴きて。ぴんく。しやんくと専ら鐵面皮を習ひ。生粋を学び。人間普通の才氣藝能も無きる男女同權の屈理屈を說き。禮義孝悌の道も知らぬゐ父兄の舊習を嘲り。父母が洋語を知らぬを好機ゐ。その眼前で朋娘と英語を使つて男子の品評をなゝ。佛語を綴りて艶史の取遣をなゝハ日本で楊弓場の矢取女や。生摺藝妓。柳語を

以て目前ゐ客のあらを誇ると一般。豈夫有然とゝ知らぬゞ佛解ぬ親父ゞ澄しゝ貌ハ。小判を脉める猫ゐ肖たり。畢竟斯なる原ハと云へバ。幼稚頃より父母たちが。躾の悪いから。爾ゐ出て爾ゐ返ると。曾子ゞ云ひたる身が ら出た錆。免れ難しと云ふと雖も。こゝもハ又餘りゐ無情ひと。真の他人の風太郎潛ゐ袖を濡しつ。そゝふ蔥出しして市街ゐ到り。商家の形勢を瞻れば。各店此軒端ゐ掛けたる看版ハ漢字をいて左方から記せり。漢の字体も左方ゝり書始める故。其綴も左方から出るハ理屈ゐ適へる様なれども有斯綴を見馴れぬ者ゐハ一寸解り難く。又大時器の家棟ゐ歐文をいて方角を

示しなるハ内国人ゟ不便なれども。四海皆兄弟の厚情ゟ
困て新参の欧米人を助けるハ。名聞ゟ似て名聞ゟ非
ずと。己ゞ勝手ゟ道理ハ附まじ。時計商の主人欧文を
知らず。髭剃の看版亦欧文で記しあれども。是ばかり西
洋人を招く所存ゟあらぜして。案ゟ業前の西洋風ゟ
ゟを表ゟを欲然ずば已ゟ欧文を知得たると云ふこと
を表はせの名聞なり。里諺ゟも看版ゟ偽詐ゟしと
云へど。當地ゟ限つて冬季軒端ゟ麗々と氷の大看版
を架けゟぐら。氷を鬻ぐず。西洋書肆の主人書籍の表
題も解得ず。経濟書を学びし者ゟ投機者多く。醫者
ハ治療よりもゟ幇間ゟ巧みなり。凡て當國の人民ハ

借金を質ゟ措ても煉瓦家を建築て。娘の前屈を賣
ても塗屋を造り。他人の賽布を的ゟ會社を結び。濡
手を以て粟を掴むやうゟ高賣をすることゞ頗ゟ
得意ゟして。負債を差引勘定されば財産の無き者
最も多く。固氣ゟ見せて不品行の者通常あれば。道德を
重んじて子弟の不品行を誡める者や。娘の淫奔を懲しなり
旦那を取ることを充きゟ父母をば未開人ありと罵詈
ゟ。義理の為ゟ身を捨て。道ゟ從つて貧窮ゟる者をば無
働者と嗤ひ白癡者と嘲げり。許多の負債ゟる者を有力
者と稱賛し。豪飲者を英雄と云囃し。孔孟の教を物の數
ともせず。狹客の者を頑固と誹り。立引女を間抜と賤み。嫁

まゆくを雇まゆく同様ゐ考へ女房を替るを畳を易るより手軽ゐ思ひ瓜核貌の女を嫌つて圓肥貌の女を好ム。縮るき髪を男ゐ似合はぬと云ひ。結髪の婦女を開明人と云ひ。道徳を疎んゝて損得を論じ。義を捨て利ゐ走るハ恰も貪慾一徹ゐ見ゆると雖も。又一切足ることを忘れて倹約を守らず。利の出る金を借りて西洋料理を食ひ。質を措て藝妓を聘ぶ等と見れば。白痴々々敷程無慾ゐ肖ずり。而又善事でも徳向でも古代より仕来りゝ事を嫌て。悪縡でも不為でも新奇き縡を好む傾て當国ゐハ正月始め松を建て七五三を飾る習慣あり。是ハ物の栄えを嘉して拈るを忌むとゝふ縡から常盤木の松をめでゝ其の意なりゝ。近年西洋飾流行して急ゐ松ゲ嫌ゐ成たと見え。炭俵の粽ゐ等ゝき雑木を押建て。僅ゐ七八日の飾ゐ數十圓の金を抛つゝ迦羅の木履を穿くより贅沢ゐ思はれ。三月三日ゐ人形を飾るハ常ゐ深窓ゐある眷族の女子を慰めるとゝ多きを今日ゐ至てひたと廢しゝ元来人形と云ふものハ天児の餘波ゐて身を拊で河へ流して邪鬼を攘ひゝ迷を悟て廢めたるゐあらず。たゞ陳腐たる習慣だといつて亭主の嫌ひゐ本づくハ情察ゐき氣隨と云ふべし。偖も這里ゐ西洋飾を潛る者を聴ゐ耳ゐ洋筆を挿みたる有り。鼻ゐ呼吸器を當てた

るあり。眼鏡ハ必ず眼鏡を掛け。口ハ必ず巻煙草をくすく。風を向て煙を咳せ。吹売飛で髯を焼く狀態の抱腹を堪へず。此外歐米ハ文盲や魯鈍ゲ無いと思ひ為る故彼ゲ善といふ事ハ何事も善と信ド。彼ゲ悪とする物ハ何物も歹と想へるより。拙手でも西洋醫を庸醫と呼ず。無味も西洋食を嫌ひと云ず。英国ハ貴族亜米利加の紳士風を倣つて商議其外総ての集會ハ皆夜中を佳時とすること一般の風ふて。要用の事務。無要の歡樂も更蘭るを好むこと常あれず。從つて朝寐午寐をもること惣ての習ひとハなれり。昔殷の紂王も淫樂を耽し。晌那長夜の宴を開きて終も夜飲通し。白晝を寐たりと云へど。衛生上から見ても理学上から考へても又経濟上から云ても明き白晝を寐て弥り。暗き深更を起てくらすハ理を推曲た酔狂者變屈人とも云つべし。有然からを一事ゲ萬事と付環り。人々消化の良否を右や左り云て食品を撰めども。身體の強弱と食物の関係を知らねバ。滋養物ゲ何人をも良食と思ひ。雞卵の清液の消化悪きを構はず。卵黄の腐敗易きを曉らず。胃弱の者却てこれを食ひ。老牛犢の穿鑿も無く。頻りと其乳汁を呑みばたの臭氣も鼻を抓で嘗るハ薬を為ると思ふゲ故なるん。酒の人體を毒あるを唱へと西洋酒を毒

無しとてこれを飲む者の多きに基督宗の晩餐に葡萄酒を許すこうら。甘しと云出せしこと歟。又其毒なりといふ酒精の多寡を依るを知らざるの故ならんと。頰杖突て歎息する折柄。兼て知人なる向水羽四郎氏より芝居小屋で演説を催し親睦會なる展くから只今来よとの招待を預り瓜太郎取る物も採りあへず使者と倶にその場に到て見れば聽衆の多きこと有繁廣き場所も錐を立る地無く。將に咲割んとする程に詰掛けたり。這眴忽ち一人の辯者憤然として演台に昇り一塵を餘らず考歟。素自を恥る故歟。まきめに己が凭れる案上の演文を讀

得ぬほどな近眼なれども思はれぬふ眼鏡を掛け。右手に水呑を持て二口可呑か否や。左手にて髯を捻り始め咳拂三度。こうに初て怒なる聲を勵して。諸君諸君吾輩が今日此場で述んとする所は急進を喝望せしといふ題にてあります。倩々考へるに総て世の中は外面を旨として内部は何でも宜しきやうに思はるるなり。試に看玉へ白癡も美服を着れば怜悧と見え。馬士も衣裳に依て旦那と見え。土百姓も髯を蓄せば官吏と見え。俗人も眼鏡を掛れば学者と見え。下着は小紋の深直し継縫着のお破衣でも綷綵として左褄を採りたる藝妓の風は見よく。空念佛を唱

へて能く愚夫愚婦を迷はし天蓋望遠鏡を下物より盤若湯る酩酊して絮語く慾張主義の生臭僧侶も衣の為る如来と仰がれ。葉茶屋ハ空箱を重て店頭を飾り。薬舗ハ茶袋を積で客を胡麻化し。煙草商。紙商ハ空俵を積で措けば。酒商。醤油商ハ空樽を並べて景氣を取る。此外醫者ハ胡蘿蔔牛房で下白の米を食ひなごりの玄関より手車を据置き。俳優ハ烏金を借りなごりの絹布を常衣とし。寄席ハ古履を振下げて大入の体を見せまで時器店ハ直しまた る時器を並べて店頭を飾る。客無き席ハ燈火を點る茶屋小家の外面なり。矢鱈ハ團扇を扣くハ鰻屋の外面なり。賣高を過言せるハ新聞屋の外面なり。賣出せるハ商人の外面なり。有然も事々物々皆其内部ハ何あれも外面專一の物なれば先此外面を進歩せるなれ。今の急務ならん。吾輩ハ角袖の衣服を着た者を見毎に疳癪が起りて批付度なり。髯無き者を見れば蟲のやうに思はれて捻潰し度なり。一切萬事粧飾をせぬ者ハ素人とて見るに忍びず。速く角袖の衣服を禁じ髯無き者から科料を取り。木履を廢して靴とし。紙傘を停めて蝙蝠傘のみとし。白材ハ金洋漆で塗り。門戸ハ必ず弓形に造り。古風の家屋をば片端から打毀し。本

造の橋をバ性急叩流し。横から駒ても竪めら賺ても外面を西洋風る致度き所存なり。偖是とり諸會社銀行等の外面必要を演んと思へど次番辯者あれば餘ハ后日論ずることゝ致きんと案を敲き目ふ角立て怒りながら退けば。衆皆喝采々々と叫びたり。偖其次る昇りたる辯者を見れば是亦同一る眼鏡を掛け。衣服形態総て西洋風を摸凝りしが両眼ふ涕を浮べ何となく嘆ずる態ハ慷慨家とこそ想れたり。軈て發と吻息を吐き。泣聲を發して說出して曰く。嗚云はぬハ云ふる優といへど泣寐入るもとの歎はゝ〳〵思へバ涙ながら這所る一言演んとする其

綷たる他る非ず。近属我國人寄ると觸ると西洋人ハ怜悧だ来國人ハ智恵ガ有ると云て羨むると猿ガ人真似をするより甚だしけれど。何故る歐米人ガ悧慧で我國人ガ愚昧あるや其原因る氣ガ就ぬ歟と思へバ餘りのことゝふ悲くなり。烏の啼ぬ日ハ有れど涙の溢れぬ日とてハ一日も無し。大約人類ふ拘りたる綷あて衛生徑肝要なるものハ無し。而て人の賢不肖ハ專ら食品の善悪る因るもの方れず。国土地の雪候寒暖る構はず。人の身體强弱る頓着せず。常る肉食をして麺包を嚼ふ非ざれず到底悧慧者や智恵者ハ出来ぬ道理なり。願くハ急々来の飯を發して

一般る牛豕の肉を食ひ。牛の乳汁と鱈の肝油を朝夕
呑むやうに致度思へども。倘馬の耳に念佛と空背
向て聽入られずば只悲しく止むのみと。涙打かこて
潸然彼此を見回まを拍手音暫らくは罷ざりけり。
浩所に入替りて又次の辯者演台に磯と推坐り。聰
の外る程大なる口を開て鞭然と打嗤ひあぐら説出し
て云ふやう。序言い廢として先今日開明の世に胸
を窺つて縡を謀り。機に臨んで變化をなし。何事
も狡猾る出没まる時い然程危險き縡も無く。錢の
贏らぬ事も無し。其例を舉て云らんに私窩を仕
てある者危險と思はば早速舟饅頭と化て水上に

働き。斯も亦危險と氣が就たまを忽ち足を洗つて
地方の曖昧茶屋へ插込むが如く。又役人が免職を
懼るゝ為れを早速田地を買求めて百姓の准備を
為し。斯も亦覺束ぬと氣が就たれを忽ち公債証書
とかして老台の生活を計るが如く。菓子商で税が
出せぬを同ト茶受の鄭を高ひ。醤油商で困窮しけ
まを燈油商と成て暗闇を照まを了簡でさへあまを。
何やら彼やら逃逢せるものなり。吾輩ハ今以て密に
ちよぼ一ちよう半花骨牌等を仕て國法を犯し。科
料を取またり囹圄に繋またりまる者を見れを。其
白癡氣たる事が可笑て可笑て腹の皮がよまるあり。

何故ゝ王突競馬ゝゝ御氣ゞ就ぬや。勝負の味ゝ一つハ無し。唯其態を異ゝるのゝ。郷ゝ入てハ郷ゝ從へ。俗ゝ入てハ俗ゝ從へ。醫者ゞ流行病を歡ぶゝ金を得んゞ為ゝり。大工ゞ出火あるゝと思ふゝ金を得んゞ為ゝり。僧侶ゞ人死を好ゝ金を得んゞ為ゝり。傘屋ゞ夕立を祈ゝ金を得んゞ為ゝり。書生ゞ髯塵を拂ふゝ金を得んゞ為ゝり。吾輩ハ世人ゞ最も狡猾ゝ出没して金贏を仕得ぬうと思へバ可嗤さも可嗤けゝど。最早餘り嗤つたゞ為ゝ横腹ゞ痛くなつて堪へらるゝぬ故今日ハ是で閉場と腹を抱へて立去ゝ。又衆喝采と叫びたり。是ゝり聽衆解散

した后。席を替へて定めの如く親睦會を開き立食の饌ゝ有就きたるゞいやすや其無作法なる事。日本で土百姓ゞ閻汁の會ゝ集合り。博徒職人ゞ阿彌陀圍をして競食ときの如く。犬ゞ無けれを御探旁者。餓鬼も素足で逃出を為体なれど。流石ゝ瓜太郎ハ他國の者だけ衆皆遠慮も有り歡待態ゝ麦酒葡萄酒たゝど多く薦めらるたれを地休一合上戸ゝ瓜太郎大ゝ酩酊し蹌々歩で旅館へ歸んと草木も睡ゝ夜半過ぎ虚氣空心道を辿りつゝ更ゝくこと一里可。只氣ゞ就て先途を見れを樹椎茂り山路ゝて溪を流ゝゝ水音の最冷ゞく聽えける。眄

妖婦犬の制配を引て風太郎を誡め未来の再會を約せ

解畜
永澤

る傍の嵓陰で。やり〳〵と呼ぶ聲谺る響きて物凄く誰人ゞ恁る所る俺を喚ぶ歟と向背瞻れも何とるく威高き一婦人年古たる松の根る腰打掛けるたり。瓜太郎深く怪しゝ斯ハ凡人ならじと。その邊る蹤寄も婦人の云ふやう。これ瓜太郎ような然の〻怪むこと勿き。ときられハ過世因縁ありて你れ了簡違を外る視あゞら悲こゐる者なり。徒らふ人の曲れる道を挙て己の屈りし行を改めも有らむ却て謗を招くぞう。恁る違ひし所為をして歎きを増さ〳〵王ひぞ。雉ゐも鳴ぞバ撃れぞと歟。人を禱れバ必ぞ穴二個有り。你能く身を省こゝ

とを務めよ。夫俏身治國の理ハ不朽の道なり。己ゞ身の始末も出来ぬる人の風を詐り國の俗を嘲るやうな心得違ゐてハ甚麼氣強くも満足る世ハ弥れず。今ゐ〳〵て心を改め人を誹らぞして己を謹むことを專らとも后来安樂なり。倘改めることを為ざれむ何時歟必ぞ不慮の災難ゐ逢ふこと鏡ゐ掛けて見るゞ如し。妄熟々瞶ゐふ當國人の勝手氣隨なること。やれ門閥ハ廃ぞの系図ハ不用のと好まハ己ゞ道理を附け。貌さへ艶色ゐれバ何所の馬骨やら知れぬ女を根曳して妻とゐ。纖多非人を平人ゐ入籍させ。河原者を却て平人

の上へ置くことゝなる至りしも其内心を探つて聴れを。未曾中々舊弊の垢諸所に粘着て糠や石鹼位で手摺ども除去れざるを。門閥を尊び系図を穿鑿せることの遠しき外國に比類無き程だに。飼犬に就てハ情無き取扱ひをぞ蒙りをれり。斉を何故と云ふに外國種の犬を愛して自國種の犬を憐れむ者無く。弱と歟。無藝と歟云て次弟に斥端と打殺せこと多けれど最早殆ど當國種の犬を盡せんとせるなり。夫強を扶け弱を折くハ義と云ふべらむ。藝あるを愛し藝無きを憎むハ仁と云ふべからむ。強弱ハ性来にして藝ハ教にあり。昔丹波國桑田村の甕襲と云へる人の飼ひたる足往とるゞくる犬ハ牟士那と云ふ獣を咋殺してその腹中より八尺瓊句玉を得しことを垂仁紀に見えたり。又河内國で捕鳥部萬の飼犬ハ恩を報ひ后義の為に死したりと。日本書記にあり。畑時能の犬ハ敵陣の隙を窺ひて數度の軍功ありしことハ人の知る所。又宇都忠政の獵犬ハ災難を告て首切れたるもその頭大蟒を嚙で主を扶け。播磨國の住人枚夫が飼たる二足の黒犬ハ奸夫を殺して同じく主を救ひ。近江国彦根の傍なる南泉菴の犬ハ能く経を讀ミたること閑田耕筆に記れたり。淡路国

岩屋の浦なる八幡宮の別當なる飼れたる犬ハ潮時を考へて浮木に乗り泉州堺に往返したること常盤草といふ艸紙にえたり。那秀吉ガ丹生の山田より取寄たる犬ハ虎と咬合て相共に死したることハ挙て新著集にあり。此外古今義を知り恩を報ひ智を顕はし。勇を奮ひたる例ハ挙て數ふるに遑あらず。恁まで由緒あるものを省みざること寔に情あき次第なり。去たゞら俺今浩る制配を悲むと虽も犬にてまだ未もの縡なり。逐日牛馬に迫び。畢る斯制配の人間に迫ばんことを怕る。你是を亦口外まべからず。人の過ハヒグ師なり。人の態を看て己ら態を改めよ努謹うて人と争ふこと無く唯何事も心裡に包て倍己を誡めよ。心得たりやと云ふ得玉へよ。聽て復国を變へ名を改めて你と連添ふこと有ん。それも人間の皮盧を被りし者の恥べき縡なれど天の結べる一世の奇遇。皆是素性れ然らしむる所。宿縁の免き難き所。這所に你に告る也無要所為と思ひ待れば。こゝを云はず。必ず后に思ひ合ることあるべし。噫最惜しも今ハ別れ時迫れりと云も終らず忽地その姿朦朧として松の下蔭漏る星の光りしくのみ消失たり。瓜太郎ハ酒此機嫌で虚心聽居たるゞ今恁有様を聞て怪有る

こゝとやをら四下を瞻回せむ樹木の茂りし山路あらぬ己が旅館の門口に平跪這てゐたりける。登晌瓜太郎心裡に思ふやう吁俺酒の分量を過したるが為に神心悩乱して虚空の妄想を興し。譯も解らぬ談議を聴てよりなき困みを仕負うきと更に言れし繹を氣に注れむ。其曉近く旅館に入て翌日午後迫生體も無く寐込みしが。そこから起出で相變らず彼方此方と目を四の様ふして瞻歩きたるに。豫て云ひし如く。何も彼も僉西洋を真似て前後に構はず無止に進む人氣なれず。壁に馬を乗掛けて志たゝめる腰を打て性も懲も無く。足元うら

鳥が立て無二の畢丸を釣上てもせず。實に鹿追ふ猟師山を見ずとや。當国の書生は西洋書の細字を見ることゝ多けれど近眼となる者頗る多く。氷をがり〳〵と噛で食ひ。美物を啖々と吹あぐら飲むこと常なれた。歯を害くまる者是亦多く。飲食ハ多きに過ぎて運動ハ少きに過ぎて胃弱を起し労瘵を煩ふ者あまたゞ。既に近眼と成てから眼鏡を掛け。病痾を萌して后療養を施ます。盗人を見て縄を綯ひすゝめ。内外雑居と成て洋語を習ひ始めるに異ならぬ。間に合めねの證文に出遅れてハ効なく。數年の勉強ハ身の仇となり。馬を得て鞍を失ひ。知識を博

めて身を亡ふ。佛造りて魂入まず。人参飲で頭を
くるまと一般。百日の説法屁一つに飛まぐ如きく。可
惜こと〻思はれたり。這所又當国の婦人ぐ昔時ハ
所天を亡ふ后剃髪して尼寺に入り。無然バ切下
茶筅に結て佛事に身を委ねしと歎云へど。近年
ハ男子と同〻散髪まること流行して。春情沢山
の孀婦ぐ髪を切るゝ誰ぐ目で瞻ても善く云へバ殊
勝らしく。悪く云へバ狂氣染。外貌と内心とハ月と
鼈。珠數もて世間の美男を算へ。墓參の歸途に俳
優を招き。淫事の世界と自任して觸らば余香を振
舞ふ風情あり。罕にハまた良夫の有る身ぐ可惜

髪を切る者有れども。切る本人の心底ハ勿論切せ
る良夫の了簡ぐ解らぜ。婦女ハもよき者故撫恤
るぐ當然なりと助兵衛密爾氏の説を聞込て下地
ハ好なり御意ハよしと女房の手を引て縁日に植木
店を素見し。情婦と併乗で人中を是看よがしに
往来する者の面の皮ハ荷牛の頸皮よりも厚く有る
といふ。而又恁る習慣を見様見真似で幼雅等ハ最
早くから春情付き。肩揚ある娘ぐ腹帯を締る。親
の臑を嚙る息子既に親爺となるも恥る色無し。
是等の緯も瓜太郎ハ始めのうちこそ甚だ珍しき
話のたね歸国の土産に為ずやと近所に有るを

見物るゝ。遠隔の事ハ人傳る頻と穿鑿なゝたゝも
居馴て見まゝ耳る嚬鼻る付てハ見るも厭と。道が
向見ずの瓜太郎も饜果たる心地して。今ハ只管舊
弊を慕ふやうるなり。機會も有ず亜弗利加の尾給
里西亜か南亜米利加の巴西耳へでも行きたゝと
思へど今ハ憑むべき馬も有ねバ手術なく。此二三
日ハ秋霧のむゝくひま無く欝氣で可手を又きて思
案の最中。旅館の役員来つて云ふやう。當国の郵便
船行綾丸。明後日守舊國へ向て出帆されず同国へ
便りまる綽無きや。殊る名聞施行の為。旅客荷物と
も今回る限りて無賃錢で運送まると聞て。瓜太郎ハ

間夜る提灯を得たる心地し。別る發足の准備として
有らねど唯當国る来て雨来るゝ成たる知己
の家々る到りて暇乞をなゝ。聽て翌々日の曉虹鳴
河岸といふ河岸より端船で行綾丸る乗込しが
海上最穏うゝて數日の后難無く守舊國の港齟
齬濱といふ所へぞ到着したり

総評

急ハ緩の反對るして物の迅速を云ふなり。先
ずれず人を制まると有と雖も躁てハ綽を仕
損じゝが做ひ。走らんとまるバ先轉ぶを学べ。
急ぐ迂遠て行くが善と歟。固よりの事と品る

依て、其速きを要するの無き有れど。物に
本末あり事に秩序ありて。これを踐まぬ時は
危きこと限り無しと云ふ。凡そ国の開明の如
き耳目を具へたる者にあらざれば其急に進む
ことを欲せざる者無しと雖も。一人の開明は一町
内の舊習に妨げられ。一町内の開明は一郡の舊習
に妨げられ一郡の開明は一縣の舊習に妨げられ。
一縣の開明は一国の舊習に妨げられ。一国の開明
は尚宇内各国の舊習に妨げらるゝことあるべし。
夫人類は脳力をもつて事物の道理を解
得べき者なり。然ば迭の間に奈何なる件の起

りて爭論紛有るも皆道理に訴へて腕力兇器
に憑ふに及ばず。兇器は牙角を以て無智の人を
害する猛獸を擊つの為の具にして決而人類を傷
めるの為の具に非ずと。斯は人智開明の高論に相
違無しと雖も。今隣國で專ら兵を練り軍備を
整のへ。而は我國に兵を練り相當の軍備
をも整きねばならぬ。爰に捧をもつて我を擊ん
とする者有らば手をもつては受難し。我亦捧をも
つて受けねばならぬ。鐵器刃物をもつて我に
傷けんとする者有らば。木竹の棒にて禦ぎ難
し。我亦鐵器刃物をもつて禦ぐねばならず。畢竟

善き新説も巧みなる新法も隅から隅迄行渉らぬ間ハ悉皆舊説舊法を廢ることハ能ハざるなり。これを容易く喩へて云へバ日本の衣服の如き。裁縫方形まるゝて非除畳むも便あるも。圓形體軀ハ頗る着憎く。三角の衣紋ハ意故地ハ頸ハ合はず。二本の脚を一束ハ包めむ足掻反く。脊中一重ハ前二重。帶を下れむ胸部ゞ開き。上部へ締れむ裾ゞ開き。向風ハ股を顕はす。追雨ハ袂を濡す。有恁不便の衣服さへ行先々の諸家ハ倚子の准備の靡きうちハ西洋服ハ攻めゞたきことならずや。倘急ハ進んとせば先世ハ無餘所開明を進むる手段を採るべし。急進國の人開明の本旨を曉りて物の本末を考へ事ハ秩序を踐むこそよけれ

守舊國

守舊國ハ鳥あり勘定木兎とつふ。爪の鋭きこと鷗の如く。常ハ人里ハ捜で餌食をくらん海ハ求むるものハ唯々と啼て能く人真似をすること鸚鵡ハ似たり。こまを俗ハ跡毛鳥と云ふ。又市街人家ハ都き掃溜や下水溷ハ下て餌ハ就くものハ。むうゝこゝ出。むうゝこゝと轉る。その形頭ハ鳶嘴髭ハ似て半合羽を着たるハ彷彿り。此鳥や世の開明を好まず。

人間社會改革の際まハ何時も。ぶつ〳〵と啼おぐら赤
閑山ゟ篭り。固来椎といふ樹の森ゟ巣を編で離るく
らと無〳〵と雖も。支那印度の方より古風といふ風
が吹廻し来れむ。忽地復翼をのして人里を彗歩く
態ハ。無鳥郷の蝙蝠の如く。貧つて饜くことを知らざ
るハ真宗の僧侶も及むぢと歟。偖も當國の風俗を
視るゟ文盲國ゟ彷彿ることゟ多くして急進國ゟ異
なること又甚だ多きやうゟ思はる。先一月一日ゟハ皆
産土神ゟ參り。それより恵方の諸神ゟ詣で拝ま
ること蟻ゞ觀音參りを去るゞ如く。續々として賑ゟ
し。今朝ハ福茶とて青豆。梅干と山椒實を入れたる

茶を呑むこと一般の風ゟて。今日金銭を拂出ことと
を嫌ふハ其謂を知りがたし。今二日の晩ゟハ良夢を
こんと各人皆宝船の画を枕下ゟ挿こて寐ゟ果報
を寐て待つの了簡とこそ思はれたり。今六日ゟハ厄拂
といふ者来ること十二月三十日及節分の晩の如くこ
れゟ僅の銭を投へて一年中の身丈厄を拂ふとハ些
下値過ぎた虫のいゝ嘶なり。今夕翌朝七種の菜を叩
て囃せ音ハ毎家ゟ囂せしくして耳も筋斗るがごとし。
今十一日ハ新年土藏の展初めゟて今朝鏡餅の雑煮
を祝ふ。今十五日ハ小豆粥を食はぬ者なく今廿日ゟハ
愛比壽講とて親戚知己を招きて終夜宴飲を。此事

また十月廿日あり。二月午の日あり。稲荷を祭りて子供ら太鼓を叩せ各家赤飯を炊て来者ら振舞ふ。四月八日ハ競つて甘茶を呑。暑季なれば我勝ら枇杷菓湯を啜る。輙鮒の水ら逢へるが如く。猩々の酒を呑むが如し。又五月五日ハ布又紙もて大きなる鯉を作り竿ら付て屋上ら颺ること男子のある家挙てせずといふこと無く。これも鯉ならやうらせんとの意あるといへども。人間ハ此魚を羨ミ釣針ら拵て生刺身らなるを思はざるの故ならん。七月ハまた軒端ら提灯を架ぬ家あり。七夕を祭らぬ者あり。此月廿六日の夜ハ大陰も颺ることを待て拜む者高臺の酒楼茶屋小屋ら群集も。八月九月も亦満月を祭りて團子。栗柿芋を供ふ。十一月酉の日ハ大熊手を求めて家の天井ら架措く。世間の幸福を掻込んが為なりと歟。十二月八日ハ来年の事始めといつて竿の先へ目笊を付て屋上ら出もこと二月八日の如し。此外年中の行事ら珍らしき綜種々ありて中々一朝ら覚えきれもせず又探ることも容易ならず。是より人の風俗を聴んと心此ら有る胸ハ幽不音も能く聞え。眼ら遮る東西も最多く。這里ら除餘目ら付たるものハ男子が頭髪ら固油を付けて天窓の脳天ら毛を結び前ら曲げたるハ鳶嘴の如く。後ら垂れたるハ采配の如く。可嗤こと云ふばかりあらぬど。這里

り眉の細きを通といつて極細く剃付たる者多く。帶の低きを粋と云つて臀の端へ締めたる者多く。中年以上の婦人ハ必ず歯を涅く染めて眉毛を剃去し。足袋を穿くを不粋と云つて寒中も凍縮たる足をしなぐら素足で歩く者多く。頭髪を不残と剃りたる者あり。全體に刺画を仕たる者あり。生れて一二歳までの子供ハ頭の中央へ蜷の目形に毛を残したるものあれども。十に八九ハ全坊主にして有く習慣なれど。當國の者ゞ小児の名を呼ずして一般に坊と通称するのも頭髪を剃りのこしたる記りなると。是等皆他國の者より見る眉ハ奇躰奇手烈といふと雖も。豕を頂ふ者その臭きを言はずと歟。支那の豕尾琉球の結髪をバ嗤へども。恁る風俗を世に最も良ものとして有ハ全く己ゞ舊習に迷醉て未だ醒めざる者の如し。此外また一奇人と云ふ者有りて其類種々様々あれども元来奇人といはるゝ人ハ皆迭に其風俗品行を異にして。所ゞ一二を挙ずに變形を物を冠り。異妙な衣服を着る。辯舌巧みに空説を吐き。虚論を述べ。好んで静る處に寂居して時の俗を誹る者あり。粗衣を着て粗食を食ひ金銭を欲がらず。栄耀を好ます。たゞ他人の立身を嘲り富裕を悪む者あり。人に逢會ことを嫌ひ交際を厭ひて何所へ行くにも連人を好ま

す。知己の家を除て道を縫歩く者あり。これ等外国
る在て、姦人變人と云て近寄る者さへ有らぬよ當
国ぞ、有徒奇人を尊び敬ふこと厚けれど當人はまた
く得意と増長の容子る見えたり野夫るも功の者
有りとや。有斯国もまた僭越たる者有て。外国れ
噂を聽き。国益とつゐハ二の次大の名聞。專ら鼻下の
建立る新聞紙を興したる者有しゞ。風土る適ぬと
見えてこれを買て看る者至て尠く。人の看し跡を
借て見ること流行せゝ。銭ハ吝んでも義理ハ欠れ
ぬ。百貫の替代る編笠一蓋一年分の見料る天光砂
糖の半斤や舊澤菴の一本ハ酬はぬ。ならぎ。こゝも
積れぬ小くあらと思ひ立たる登日より舊新聞の
借用をひたと断り。運動ぐてらる毎日々々新聞社の
前へ立て押合減あひ閲ること一般の風となり。また
政府も新聞の世る裨益あることを知らざるまハ有
ぬども骨を舐て皿を念ひ。糠を嘗て米る及ぼをと
ふ。那慈悲をゝて庇れたるを忘れ糞を垂て威張る
やうる記者有るをゝて厳しくこれを罰せるより。此新
聞紙も次第る衰微の色を顕はして近年ハこれる
役事せる者無らんとせるの情勢あり。話表書籍れ
出版をせる者有れども古書の飜刻のみて新著書
及び飜訳書を看る者無故る當國る限りて新

説の出ることゝ靡く。新法の行はるゝことも靡きぬ。琴柱を膠したるゝと同じく。免れ難き頑固の自分免許で推弥り。世の胡盧まならうとゝ梦にも知らぬ画工等まで。真を写さを次ぎて一筆がきの太刷で画く鳥を買人ゲ多きゝ比類罕なる空画として蔑弄れる恥の掘上げ。古図を潜る模写り己ゲ得意の新図と伐るも。そこゝ蜷の道を蛇ゲ知る。勘付れたゲ百年目。何時の間まやら人々の背指されてゐるを悟らぬハ浅猿きこと恨り無し。鼻を高めてかき馴し彩色で胡麻化さ草花ハ。かゞ巾更紗の模様となり。循り環りて我敷し布團の表る顕はれたるゝ。張合も

後漢書張衡傳云畫工恶圖大馬而好作鬼魅誠以實事難形而虛偽不窮也。

無きことゝ雖も役ま達たゲ物怪の僥倖。多くゝ世上る抽つと無器用技術の見本の為る外國人る買はるゝことを。知らを面目あきまぐたるゝ。無愛鐵面とすきてゐるハ水を溉たる蛙の如し。これその由縁無きまあらず。各々皆亜空事とて其實物る肖寄るよりも寧ろ似寄らぬ東西を風雅として好むことより起りしたり。又宗教ハ盛る行ハれて隨分熱心なる者多く。弥陀如来を信仰し。釋迦牟尼佛を尊敬をることゝ歐米るて造主を信じ。耶蘇基督を敬まるゲ如く。元来宗教あるものハ現世の為る未来を説きしを悟らぎして今ハ来世の為る現世を軽んド

大同類聚ま醫方之在于我邦也自神世矣神國之民服他邦劑而何應其恵乎人應其土地而稟氣之偉其土人服其土宜不可無効也く漢醫を好む者多くハ斯迷説ま憑る

身代有丈香花院へ起附まるもあり。僧侶ま欺かれて主人ま背く者あり。弥陀の傍へ速く往きたしと云ふ老人あり。来世の夫婦を娛ふ情死まる若者あり。凡て這地ハ孔孟の説ま泥む者多きも密山爾氏素比西耳氏の説をむ聽くをも厭ひ漢法醫を好んで難症ま葛根湯を呑みわるハ劔渉りを見物まるより危險く。西洋醫を嫌つて其薬劑を手まだも採らぬハ己ゞ浅識の看版を顕はも。凡て支那製の物品ハ不器用な所ゞ好といつて喜ん多きも。西洋製の物品ハ精巧過て味ゝあいとて求める者鮮く。各人新製物を嫌つて古風品を好むより。什具諸式ハ皆色を付て故意古めゝ。塩氣を塗て故意錆を出し。魚ま喰はせて虫孔をあけるもあり。煙でゆぶして焼らもあり。石材の印ハ所班ま剛たるを巧彫とまれば。彫刻師ハまざ〳〵筆法を剛て價を貪まども。物を毀して巧手と賞らるハ當国ま限るといふ。又興茶瓶茶椀ハ茶渋で汚れて穢くあるを貴しとまむ。倘心得ぎてその茶渋を洗除も時ハ旦那眼を剥出して叱る。汚れを除去て懲言をきく、真ま埋らぬ嘶といふべし。有然又這里ま訳も解らぬ唄を謡つく〳〵琴提琴を弾き。鳶の巣立る似たる横笛を吹て樂む者有れども。立琴風琴の調子をも合せ得る者有るを

聞す。又此国の者ハ、ゝ女房を視ること犬の如く。こゞ子を扱ふこと猫の如くなるゞ。似た者夫婦とよくゝたりので。鬼の女房ハ鬼神とやら。女房ハ良夫を臀ハ敷据え。貌へ泥さへ塗付る。茶碗と茶碗で負ぜ劣らぜ。大立廻りをすること有れども。犬も喰はねむ泣寐入り。一夜ハ和睦整ふハ奈何ある約をや結びけん。同ゞ長家の者ではら知る者とてハ無りけり。爰ハ就中懼るべき縡といふハ各人生命を鴨毛より軽く思ひわゝと見えて。惚た男と添へぬと云つて自害し。意ハ従はぬと云てハ手撃ふし。姑ゞ矢釜敷と云て身を投げ。嫁ゞ邪見だと云て首を縊り。私生の子を産で雪隠へ投込み。金を附て貰た子を膝ぐ壓潰ぜ者ハ。毎年〳〵々々何人と云ふことを知らぜ。小指を切て夫婦の約束をなぜ者あり。血を呑合て兄弟の義を結ぶ者あり。身ハ徒ちあゝも頭髪を剃れむ詑の恢はぬことなく。竊屁をしても舌ゞ黄色く無けきむ罪を被ることと無きハ。戯事めつて妨害もあらぬど。肩ゞ脹と云てハ。そこから血を取り。歯ゞ痛むといつてハ。歯莖から血をとゝハ容易ならざる軽却合。これぜら訳の解らぬハ最些と釣合のあそぬ喇といふハ當国の者ゞ纔の食物を明日迄蓄けぜ腐敗るゞ勿体ないとて満腹の上ハ食て仕舞ひ。茶積屋で物を遺ぜハ

空損だと云て下向と出るほど食込む。その食物より身を軽んずると見えたり。有然るまた各人が什麼穢た場所でも縁起悪き物へでも塩を振蒔けむ清まると信居るハ道理も絲瓜も無いことあて。蛤を药蒟ハ虫の毒だと云て幼雅ハ食ハせぬも。赤蛙ハ虫ゝ良薬だと云て食はせる者多く。蝮蛇を無双の強壮劑といつてそれを浸した酒を呑。土亀を最上の美味と云てこゝを求むるハ代價を惜まず。蛇と土亀を美味物として食する國。南亜米利加ハあるとかいへども。當國の外未だその實際を見たこと無し。梅干を神妙の良薬と考へ。舊沢菴を最上の菜とするとり。

感冒ハ必ず梅干の黒焼を湯ハ漬て呑せ。産婦ハ定例で舊澤菴を菜として食けせ。身ハ悲ミ有り家ハ殃禍ある時ハ。物の祟りだと云て神佛ハ祈禱をなし怪我火傷をする時ハ呪を専一として藥を付ることと罕るり。有然又幼雅ハ皆腰ハ守袋を振下げ。若き男子ハ総て脱守歟。掛守を待ずといふこと無く。女子ハ必ず長き袋まこれを入て帯の表ゝ締ることと一般の風習なり。此外父母ゞ病む塩氣を斷て食けず。妊夫が煩へむ茶を斷て飲まず。毎月一日十五日廿八日ハ毎家茜の飯を炊て魚類を食ふ。あたるゝと聞るゞら河豚を食つて命を捨る。神ハあれども非禮を受けず

と。知らぬ祈りハ為ぬものを。果詰りやね百度と。苦敷い眄の神憑き。病でめら知る病痾の値打。當坐ハ懲て も臀拔の三日坊主を諫めるハ。糠ま釘打つ利目も無し。と瓜太郎ハ心裡ま断念めつ。又眼を轉じて家屋へ北建築を賑まふ。昔何の国でも立樹の儘木材を找て家を建しハ鋸鋸等の有らざりしが故まて。後世それ〳〵の道具整てより切こと削ること自在ふして。四角。六角囘形。角除と望ミ次弟の恰好ができまふ。當国でハ今ま故意と赤松。楓。槐等皮付の儘を柱鴨居ま作して。氣取たと歟風雅だと歟。妙ま所へ風韻をつけるも。畢竟士風を慕ふの故なり。又洗湯を支躰の温め所と

して此地の者ハ皆温まりて来ようと云て来ることまれで。霧間ま熱湯ま這入ること最も流行はるより。熱過ぎを好湯と云て貌を皺めて這入り。温きを日向水と罵ハて。不精無性ま颺り。三助ハうるさを厭て敲けども返辞をせず。番頭ハ熱湯好を指して我慢強しと誉る。元来入浴ハ垢を流除んが為まして療養ま入浴者ハ扨措き。壮健ま者が決して體を温める為の場所ま非ず。寒くハ衣服を重ね。尚巨燵まあたるも碍障無きまの。垢の流除場ま来つて體を温めんとはるハ心得違ひの最極り。また毎年五月六日まハ菖蒲を入て湯をわかし。暑中の湯まハ桃の葉を入き。十一月初

めの酉の日ハ柚を入れたる湯を沐浴ふ。下駄ハ焼味噌裡の效、驗ゞあらうとも保証ゞたく。信心を次として意氣張を第一とする神佛の祭禮開張ハ無理算段をして身分不相當き綺羅を飾り贅沢を盡し。宵宮當日過ぎたる后ハ。悔む負債ハ跡ハ祭禮。五尺の體の措所無く。一時姿を慝せも有り。溢れて死るも亦多し。有恁所柄ハ似ぜ這里ハ最も感心ある縡といふハ。各人常ハ儉約を專らとせること。子供ハ月々年々ハ生長つ者故其時々身ハ合せて衣服を裁つ晌ハ。春新調た衣服ゞ其冬既ハ短くなり。本年の衣服ハ来年不用となるより。十五六歳までの子供の衣服ハ皆肩と腰へ縫揚をして置き。丈行の長くなる從ハ。其揚を下せハ。假令着たる牌の恰好ゞ見馴れた者ハ好風とハ思へども。儉約の為ハ頗る便利あること。然るその衣服ハ揚ゞ少あれ共醜体と云て廃したり。揚の無いのを可嗤と云て着るのハ。何とも彼とも云ひ難き間違あり。又十歳未滿の子供ハ親より大袖の衣服を着せ。高人ゞ前垂を掛て歩くを常とすれども。子供ゞ大袖を着たるハ鼠の如く。たゞ無恰好のみならず。前垂ハ元来儉約から起りしものなり。衣服の汚るを庇ふ為なれども。坐る晌こそ役ハ達べ

し。道を歩くふ何の用うあらん。況て木綿衣服で絹布の前垂を掛るハ。書籍を裂つて表紙を包ミ。什具を賣て倉庫を建るが如し。憶白癡々々敷粧飾をも習慣も有るの哉と。思はず獨り大聲を發されバ後る何時ゝ老翁在て瓜太郎を礙と脇ミ。汝小賢くも俺國の風俗を聴て粧飾ありと罵れども。宇内各国孰れの隅として實要より粧飾を尊ぶぬ土地無し。やゝ開明だの。それ文明だのと云へども英佛の人民まて寒暖を凌ぐ衣服まさへ乏き者が幾何の金を拠つて體ゝ刺画を為るを見ずや。婦女の細腰ゝ無締胯きゝ袴様の物を見ずや。軍人の帽子ゝ付たる毛の前立ハ何の為ぞや。痛きを耐へ寒さを忍ぶも飾の為なり。冗費を厭はず臀を慝さるも飾の為なり。況て勝負を專一とする戦爭まさら飾をまるゝと多し。又汝の古郷日本國でもこゝやびたる男女ゞ恰好の醜きを厭ふより。寒さを忍で衣服の薄着をまるといふ噂あり。そもゝ〻ならぬ。婦女が頭髪ゝ大金の櫛簪を刺さゝら粧飾を尊ぶ明證ゝ。歯の無き鼈甲の櫛を紐まて結付け。小人島のお玉抄ゝ程な耳掻を簪の頭ゝ付るハ何の為ゝ。やゝ近属人の話を傳聞む日本でも黄金の指環をはめることと流行なりと歟。それも有餘ゝ金ゞありても

る縡あるまじきものなれ。三十日ゐ遣るべき家賃も拂はず。物学びしかる謝義をも延し。醫者ゐ薬代滞ふらせて指ゞ耀れむ心地ゞ宜歟よ。寔ゐ是等い鈍しき飾ゐして殊ゐ他人ゐまで迷惑を掛けるまあらずや。そもそとハ異て當國でゐ供の衣服ゐ揚をなし。又袖を大くせるい織布ゞ餘るうらのことまて。假令恰好悪くも體ゐ傷けること無く。又故意金を費して生ることゐも非ず。然む仕たとて別ゐ損も無く。為ぬとて何の得も無し。又那高人ゞ前垂を掛る所謂といふハ。俺国の織物一反まて衣服を仕立まむ六切として二尺内外の切ハ必ず裁縫職の餘贏とする。これを一切と号て自家で使用ふも有まじ。多くハ裏を着て賣捌くゞ習慣なり。原衣服へ餘計ゐ切を縫込こあくも着る者ゐ益ゐ。臀の拔たるハ尚羽織絆天で匿せべし。膝の拔たる裡醜きものあるべうず。然む非如更ゐ價を出すも一挙両便ありとて。元来皆各身ゞ掠められたる切と知りつゝ買求て前垂とあせ。坐して家内ゐ掛るハ膝の破損を庇ふゞ為まて。道を歩くゐ掛るハ途中知人ゐ逢たる晌膝ゐ手を加るゞ當國の式禮の名。登時齊一膝の手垢を防ぐゞ為まり。木綿衣服ゐ絹布の前垂を掛る一條ハ固より粧飾ゐ相違なきも。下ゐ破衣服を着て不

相應ま廻合羽や鳶合羽を着て歩くが流行る國さへあると歟云ふ。是等ハ衣服を庇ふのでハ無く。專ら敝衣を慝さんが為なり。前垂の得も亦汎るると云ふべし。こて等の綷も辨へず減多ま口を敲くまいぞよと言迫れむ。瓜太郎ハ這所が一番議論の仕晌と揎ゑりをして老翁ま對ひ。你辯舌ま任して屁理屈を並べるも何而閉口まるべきぞ。能く耳孔を穿つて聽まねゑ。俺ハ固より粧飾の飾りたるまを多いとハ云はむ。大約物の粧飾ハ開明の進歩と俱ま增まるのまして。野蠻未開の国まハ却て粧飾の少きものあれど。當国ふてる供の衣服ま揚を仕たり。大袖を着せたり。商人が前垂を掛るを當然とまるハ飾と云ふよりも寧そ風俗の慣ありと云ふを聞て。老翁ハ熱氣とあり。左様ロ廣いことハ云へまいぞや。你の國でも下駄や草履の形好を專らとして要旨を后ふまれむらそ。前緒を中央ふまけるふ非ずや。又傘も柄を中央ふ付れむらそ。風ふ雨ふ半身を濡まの愚さハ蛮ふる堪たる悞謬なり。倘恰好ふ構はず實要を先ふまることならむ。ふとて前緒を戻寄ざるや。なんとて傘の柄を端ふ付ざるやと云ふを負ずよ。你年ハ老ても理ふ疎きものかな。夫山椒ハ小粒でも辛く。獨活ハ大木でも弱きを知らぬや。物

の強弱ハ決而形の大小ニ依ること無く又數の多少ニも拘ること無し。一人ニして五人力ある勇剛者有り。十人寄て一人ニ及ばぬ弱虫有り。指とてその如く。拇一本の力ハ残四本ニ適ぎる故ニ前緒も下駄の中央ニ当げるのゞ至當なり。唯足の开や指の數を視く履物の形を誹るハ一を知て二を識らぬ愚の繹なり。又俺国の傘ハ舊天蓋の像をとって作りしものなれ。大古ハ外の中央へ紐を付け竿ニ鉤して奴僕ニ差掛させたるを何時の頃より歟。内部ニ柄を付ることゝ成て。今ハ自身で差歩けども。子供ゐるゞ伴た者ハ冠笠なり便利あるとて。その儘用ひ来りるる

り。何そこれらを愆りと云ふべき。有理も知らぬ他國の棚卸をせるとハ小癪る老耄なり。軽薄ニ世ニハ己ゞ身せら脩めることを知らずして他人の過を誹る者少ゝらぬど。こハ己妄狂して子の遊蕩を誡しめ。己摘食して子の摘食を咎めんとせる者ニ異らず。己を舎て人を教ふる者ハ逆あり。己を正して人を化せる者ハ順あり。逆ハ亂を招き。順ハ治の要と云ふ。此の道理を解し得るや。どうしゝや何ゞやと詰掛れて。老翁焦躁て此奴近来當国へ来て無要繹を挙つらひ。誹り歩くを憎らしゝと。町内の壮佼寄て疾より撃懲さんと云ふを。白疾る構ふハ此

誠めを忘れて瓜太郎火急の厄難に逢ふ
鮮斎

方の不利益今ゝ何所ぞへ去るらん。先々打捨措く
べしと窘めたるのも年甲斐なく。無益罪業を造る
より見逃しあらん慈悲情そをを左右とハ知らぎし
て。日増ゝ募る悪口雑言。いひ瞞ゝも誰やハ听ん。最
早堪忍ありがたし。衆皆蒐れと敦圍て激まを罵の
一聲ゝ。殴と簇立つ友雀。何所ゝ隠れ居たるやや。五
六人の壮佼現出でものな云せそ息の音止めよ。逃を
な遺るなと。咸聲々ゝ呼をあゝら前後左右を拿
篭て。手々ゝ棒を閃ゝやるとふ撃て蒐れず風太
郎ハ問答の暇もなく。多勢ゝ無勢で手出も協はず。
忽ちそこへ打据られて。身の痛ゝや堪ざりけん。磴と

仆れて息絶たりてど暫ありて蘇生ゝ。身傍を瞻ゝ
ゝ彼者ハ行方へ行きたるや。残ゝハ俺影のそるれ
む。鈍まし〳〵も断腸許りなる遺恨ゝ堪ぬ
嘆息〳〵心裡ゝ思ふやゝ。噫無情目ゝ逢ふりの哉
俺ハ元来善ゝを歹〳〵と云〳〵ゝ非ぞ正き事を
愁れると謗りたるも非ぞ。然ゝを道理でハ責めぞ
〳〵て手込ゝ人を打擲ゝ。末開国の風とハ云ひるが
ら斯儘捨て措日ゝハ日本の弱氣を表はせ道理な
り。跡趕蒐て目ゝ物見せんと。瘦たゝ腕ゝ力をこめつ。
偶然思迴せを嚮ゝ急進國で怪〳〵き婦人ゝ誠め〳〵
綽を俺空心ゝて流〳〵。一圖ゝ心経病と跳倣〳〵た

る。其教誡露だりも錯ぐを有恁災難る逢ひしこと
と咸是俺懈りめ怪ぶり、感嘆しそを小就ても那
婦人ハ何者なるや素性、更る解らねども。深き因縁
あるまむ去て未然る告て誡められしを。今更思へバ
悔しいと腹立しいとて男泣雫時涕を押絞りお爺る時。
此方へ蒐来る靴音る驚きて眼を見開けむ。數人の兵士
前後より走り蒐れる勢の伊太郎ハ再愕然。辯解隙
なき火急の死難ぴむことを得ず兵士を寄しと側
る有合ず。礫をつかてる打投々々一生懸命防げども。憑
おる足らぬ疲脆ゐて撃勝よしも有らぬ終ゐ傍へと
掠込れ。手取り足採り曳擔ぐ為る。夢歟と思ふ苦し

きる慌たる聲をあり立て。人々怪ち玉ふな某犯せし
罪有らぬと叫ぶを聴で。忽ち沖る繋ぎたる軍艦へ
連行き。一室る投込れたるる。這所ゐハ三十人可の人咸
潸然と泣きゐる故。所謂を聞けむ此者们ハ亜弗利
加。世念加比亜の人民ゐて此艦主。波里比亜人の為る
生捕れ奴隷る賣らるる事と始めて知て伊太郎一度
ハ驚きしが。今更歎くも拴無きことなり。命さへ有れば
復遁ることもあるべし。各自運を天る任せて泣た
まふなと。落付拂つてゐるうちる日も稍暮掛らんとも
る項忽ち一天墨を流せし如く墨雲起りて風雨烈
しくなり。昔義經が大物が浦る難風る逢し胸も恁

やあらんと思ふむり。左右まうち東方より山のやうなる大浪来るよと見えしが。艦て艦ゐ衝ると碇綱ぷつゝり断て矢を射るやうゐ押流されぬ。ハと云ふうち。百千の雷一時ゐ落ちたるが如き響して有繋鐵壁ゐ等しき軍鑑い大嵜の為ゐ粉微塵ゐ破れたるより。風太郎も今や水屑と一生懸命。駐り柱ゐつかまらて脚を前へ差出せ機會ゐ。豫て此艦ゐ繋ぎ有りたる小舟の中へ落入しが今ハ命も助からうとハ思はぜ。身さへ心氣も疲労果て。流れゆくこと何百里あるを知らず。身を捨てゝて浮む瀬と寐るゝ無ゐ一寐入躰とやらうし。暁近く目覚て畧れて磯打浪ゐ揺揚らるけんが不側濱辺ゐ寄りたりけるが今ハ雨風もやんで朝日ほのぐと昇りたり

総評

昔ハ黄金世界と云て各人羅病こと少く。殊ゐ生命の長きこと百歳二百歳ハあるか千年年二千年の高齢を保ちたる者珍しとせぜ。又當時ハ人ハ皆丈高くして眼性善く。風俗を奈さぜ品行を破らぜ。什具諸式ハ製が良く。塗物類ハ地が固く。物として念の入ざること無く。事として丁寧ならぬもの無し。一切萬事今を昔ゐ比れで善ゐり為る物寔ゐ少く。唯近年ハ子供の智恵付と

小娘の春情付ゲ早く成たる可と。是ハこれ我國好古家のこゝらぶ世界百国昔を慕ふ者ゝ通言あるこゝ歴史を者る者の知る所なり。有然れども試ゝ我国維新前の一物を方今ゝ比れむ其製造の孰れゲ巧精るゝ歟況て昔と今を比れむ孰れゲ便益多き乎を知らゝと容易ゝるべし。譬へバ火打道具と摺附木と孰れゲ便あるや。二人ゝて壹人を舁ぐ兆轎と。壹人ゝて二人を挽く仂車と孰れゲ便あるや。漢医と西洋医と其術孰れゲ巧者あるや。龍吐水と唧筒ゝ孰れゲ巧ミあるや。日本形の船と蒸

氣船ゝ奈何。飛脚と郵便ゝ奈何。両天傘と蝙蝠傘ゝ奈何。土佐菱川の画と方今の画ゝ奈何。延宝天和時代の衣服の摸様と方今の摸様ゝ奈何。昔ハ油畫寫真有りゝ。石版銅版の彫刻有りゝ歟。活版ステレヲの器械有りゝ歟。陸蒸氣有りゝ歟。風船有りゝ歟。此外奇事珍物年々歳々と新る興る物或ハ巧ミる形を改むゝ物挙て枚ふるゝ遑あらじ。然れむ昔時を黄金世界なりゝと云ふハ野蛮を指して謂ふこと歟。不便を示して唱ふゝこと歟。昔人ハ何故ゝ建康るゝ歟又長命をまぐき由縁有り

や。風俗品行ハ何を以て昔時を良とするぞ。什具諸式漆器陶器の類も價を惜ぎれハ今とて古物ゟ勝る物有ん。賃錢を減ぜれぬ今とて念の入たる物も出来ん。又彼今時の娘油斷がるらぬといふこと既ゟ安永天明時代の書ゟ見えたり。尚假ゟ此時代より云始めしと定るも百余年前既ゟ此語あり。何ぞ小娘ゟ油斷れあらぬこと近年ゟ限る可らず。是等ハ皆昔人を質朴と信ぜる者の云出せしことなり。世ゟ開明の進む時ハ固有の風も更めざるを得ず。一己の氣風ハ一己ゟ行はるゝも親族朋友ゟ通ぜず。一家の風ハ一家ゟ施さるゝも世間ゟ通ぜぬ。一国の風亦然り。魯鈍ゟ頑固ゟ勝ると歟。世人我氣風ゟ頼らぬ。我國風ゟ泥まぬ。專ら他の長を採て我短を補ふことを望まゝけれ

開明國

夙太郎ハかねて日本ゟ在し頃開明と云ふことを耳ゟ聞みたりしが。未だ真底実地ハ開明といふものハ何あるやらハ知らざるゟ。今漂着したる國を開明国と聞て。心裏ゟ必定政府の法律完全整ふて萬事條例の行届うざる所無く。兵備十分ゟして宗旨も能く開け。醫術ハ申もまでも無く。凡て技術

妙る達して盲人み見える眼鏡より聾耳み聞える機械まで一切の事物悟も有うと思ひきや。當推量と越中犢鼻褌。そつて措た向ふら外れ掛たる大當違ひ。當国ふハ政府と云ふものハ有れども歐米等の外面公平の政治と異ひ。その吏員等ゞ事務を扱ふ親切ふして曖昧の挙動なきこと。親ゲ子の世話をしても如彼いできぬと思ふぜめり。心潔白ふして為ることを咸公平ならぢと云ふこと無れど。賄賂を遣つて官職る就く者や。諂辯をもいて給料を得る者ハ勿論。役る達なき者でも我縁故あるを為る吹挙して吏員となし。木偶一般の人物でも已ゲ貝負の輩をハ採用して録高を得させるやうふ偏頗たる所為あるどハ鬼の毛で突たほども見えず。有然また智浅く識少きも門閥の子弟の。代々政権を採りて。多分ハ録高を給はり結構ある館る住んで。遊山と歡楽る日を暮し。淫事と酒宴とる夜をふし。萬事勝手の贅沢を盡して世を面白く孫暮る。才有り学あるも民百姓の子弟ハ代々彼等の統轄を受けて。身業の容易あらざるる苦ミ。雪の朝も雨の夜も身體を休憩る閑とて無く。汗水垂して穡げども歡楽ハ代る成うとハ。知らぬゞ佛る手向る意で。重き貢税を收めて残り。勘定合て銭足ぬ。あゞき無き世と恨ミ

つゝ不自由勝る日を送る。目も當てられぬ形勢なるどい。昔時外國も封建政體の頃行はれしことありと歴史もとつて聽くのみなり。それハ偖おき這所も亦都會の場末もゆきて見れむ。彼所此所も寺院も如きもの有まゝども此ハ唯死人を埋める場所もして番人の外僧侶と云ふ者無けれむ。宗旨といふものも無く。醫者や病院ハ勿論。兵卒もあく警吏も無し。夫ハ其有理當国の人民ハ能天理を辨へて人道を識り。これを履行はぬといふ緯無けれむ。法律を以て定むべき事無く。條例を出して限るべき緯無し。況て悪事を働く者や親不孝をする者無けれむ。刑事を以て罰することあく。宗教を説て導くも及ばむ。人々養生もくして病煩ふ者無けれむ醫者も病院も有らぬ訳なり。喧譁口論總て間違も有ること無けれむ警吏ハ無要。戰爭の有ること無けれむ軍兵も要無し。さらぬだに国を愛することも深けれむ這地ハ仮令兵役あるとてこれを免れんが為る養ふものきたり外國へ逃けたりするやうなる不埒の者あるとハ思へず。また怠させるやうなる箭違の親もあらぬ。何した事やら這里ハ盲目聾耳唖の如き尼羽者有らぬむ。按摩もする者無く。肩の脹る者や腰の弯りの有らねむ揉せやうと云ふ

者も無し。親孝行を仕ても當然のことだと云て賛る人無く。況て褒美るど出せ事をきうも。他人の物品を盗んだり借りたり約速を違へた事が無いとて。其者を正直と賛めも。集會其他時限の定まりたる場所へ出るも遅刻まる者無く。要事有て来りたる客を涜々と俟せるやうな情察も無き亭主も無し。有然るも此地まハ鐵道電信天文工作等より凡て著書出版。新聞紙も低るまで悉皆人民の會社もて為ずと云ふこと無れも政府ゞ是等の商賣渋た繁も干渉せることなきハ有繁開明国だけ有ての事。凡そ政府と云ふものハ其人民の反射の如きものもあるも畢竟人民無氣力の國もて未だ何事も盡せぬ所ある間ハ。これを助け奨勵んゞ為ゐ。その政府ゞ商賣も干渉をゐし。工業をも司どるハ専々無理あらぬことだよ。已ゞ不平心より政府の挙動を誹る者をこゝゐ。言語と行跡とハ山師の玄関と奥室より甚だしく。適々斯輩ゞ五六十人の端會社を結んでもら曖昧偏頗の挙動をせぬ者少し。此等ハ家も居て戦場を談じ。畑も立て水練を誇るゆうおものもて。所謂喉元過れも熱さを忘るゝといふ族ならんと。越方各国の形勢を思ひ回せバもそす程。當國ゝ縡を視て瓜太郎ハ一々感服ゐし。聽く

又各港々ゑ到て聯れむ。何方も數千艘の南船碇綱を曳て碇泊ゐる其帆柱の混雑ゐるハ京橋竹河岸の軒端も及ずず。また市中製造場の煙筒ハ春野の土筆ゑ彷彿て大小長短ハ有れども。朝の六時から夕の五時迄絶ず煙氣を吹出せ。陸蒸氣の鐵道ハ市街の中央より四方八方横縱ゑ敷て蜘蛛の網の如く。電線ハ中天ゑ架つて千條の糸ゝ靉靆ゑ髣髴。道路ハまた横町路次ゑ迄ゑまで護謨を延べ。切石を敷詰め。水吐巧ミゑ出来てあれど雨降ゑ晌も水涌といふもの一個も無きよりゑ。長靴足駄を穿く者無く。晴雨ともゑ皆裙靴様のものを穿歩くあり。爰ゑ馬車といふ物あらねども螺旋車とて螺旋と小車の機を以て緩急動止その運轉最も自在ゑ車有りて一人乘二人乘。また數人乘合の便利ゑまた。二頭立此乘合馬車ゑ三十人ゑ四十人ゑ迄を壓付たやうゑ載ることゑハ當国ゑ来てゑら見たことゑ無し。唯荷車ゑ牛馬を使用ゑこと有れども些少の荷物ハ猿を馴して曳せること多し。又市街や村落の都合よき場所を撰て百馬力二百馬力宛もある大水車を設けその力をもつて最大ある電氣燈を仕掛あれば。蒸氣をたく手數無くして間夜も白晝ゑ異あらぬ。本街細道路次抜裏の隅端まで明く。支管また毎家

毎室ハ更あり。雪隠の中より押入の内まで曳めぐ
と云ふこと無れど。這所ぞ暗いとつふ所あるまじ
ゑる時器を見ねば夜る入たるを知りかだし。此外
傳話機ハまた家から家る傳りて三里四方乃至五里
四方る通じてあれど。近き報道ハこまを用ひ。遠
隔ハ電信をうけることと常あれど。當地る限つて郵便
る要あり。人々氣球船の舵をとることを知て自在
ふ走廻れど。遊山遠足等皆これる乗るハ日本の馬
車の如く。また船の如く。晝夜空中る往來せるさま。
恰も初春數個の紙凧が風る舞ふるふ髣髴り。何事
も一つ善れど又一つ。目の寄所へ玉が寄り。便る所
る便多く。這里る招風器といふ物ありて夏ハ家屋る
風を吸入る。投温器といふ物ありて。冬ハ家内る温
氣を運ぶこと。桶を以て水を喚より自在あれど夏
でも暑氣ハ苦むこと無く。冬でも寒いと云ふことを
知らぜ。暴風ハ燻物をして空氣の運動を停めるが故
る忽ちる止。強雨ハ電氣を傳通る長竿る雲を纏
道きて自在る止ませることを得る。有然亦蒸氣水車
の力を使用ることも外國る例あき大仕掛りて。米を
搗き。臼を曳き。木を削り。穴を穿り。紙を漉き。絹を
織る等此外一切萬端の働力。ありて歐米等るある寸
巧々機械の比類るあらぜ。総て此國ハ財産平等の

法能く行はまて。人る貴賤高下の差少く。身代る大小の差も寡るけれど。外国のやうる數万回の家産をもつ者無しと雖も。また一日立働いて五十銭内外は賃銀を得れど鬼の首でも取たやうる悦ひて。鰯の縵鱠と豆腐の汁を下物る下直酒を呑だり。煮豆と干魚で飯をくふ程る困る者も無く。痰が癒うれ美聲が出るものと云て。絲瓜の水や弘法様の腐た水を呑むやうる。白痴者無まハ勿論咸禮義厚くして道徳を重んぜれど。憾を受る事るく他人を恨ることも無し。弓箭鉄炮ハ有れども獵師が用ふるの外これを以て人ふ傷けることるく。鳥をも無益る射ること無し。

又公園地る到てこゝまで博覧會博物館其他許多の見世物あまども。相撲。牛突。鳥ハ蹴合のやうふ力競や腕力を争鬪て人類や禽獣が苦しゐを見物せるる者あらねど。これを興行せんとする者あきうも大る感服したるが。某日朝まだきより出て博覧會を觀んと。先づ其入口る到つて切符を求め。園藝館より農業館を見物したるる筆もて記しがたき東西頗る多く。只目移りして。これ〳〵と仰天せるばかり。軈て此所をば通抜る美術館る到れば陶器漆器鑄像織物の精巧るる言へば更る。彫刻画図の妙技る。動物ハ画ハ今将る動出さんとせるが如く。景色ハ遠近高低彩色と

もゝ真ゝ迫つて觸らざれた其画ゝることを知得難く。恰も幻ゝ蜃氣樓の顕はれたるが如し。現ゝられ等を眺て后ゝハ今日歐米ゝある油画銅石版の類ゝど拙く見ゝるも厭ふ。況て支那日本で画く那の光線の影もゝく遠近の度もゝき画図ゝどハ名も付けられぬ反古紙同様。よゝも画ゝどゝ云はれたものゝると。干魚食た口で鰻味はふ心地仕るがら。迂遠と循環て機械館を觀ゝる。這所ゝハ晴天ゝ雨を招く機械あり。暑中ゝ雪を降す機械あり。一尾の魚を彩ゝて忽地數萬尾の生魚を造出し。一粒の豆を曳潰して。瞬間ゝ數十石の豆を造り。土を以て石を製へ水を以て玉を造り。灰水を絞つて砂糖を製へ。砂を煮詰く醤油を造り。拮樹ゝ芽を出さ世。煎豆ゝ花を咲せる等。その理を窮めざる者ゝハ妖術とゝ思はるぬ東西目ゝ餘ゝ裡有つて各種記臆ゝること能はず。瓜太郎ハ既心倦て眼ハ朦朧とゝたれども。徒ゝ廣き館内を殘りゝく觀歩きたるゝ拘らず。脚の草卧ぬハ不審とたゞ心ゝ思ひつて庭園の小山ゝ登つて外面ゝら各館を望ミ瞻れば。巧ミゝある哉。己ゞ脚ゝて廻りとハ思ひきや。館の形孰れも環の如くゝて數十重ゝ取巻き。人道ハ其儘ありたるゝら。物品飾付の店の徐りくゝと圍りゝるゝ驚き。さてハ脚ゝて殘りゝく廻

歩きしと思ふ唯各館を直線ゐ突切たるものゝみぞあるべ草臥ぬも有理。されハ循環の建築と云はゝ全く地中ゐ仕掛し水力の働きゐ依ると云ふ。既ゐて此日も黄昏頃ゐなりしかば。旅宿ゐ戻りて翌日ハ又何をゐ瞻んと胸の裡急うぬ旅路ゑ假枕明るゐを待て眠りたり。却説また這地ゐハ外國と同じく。小鳥の聲や虫の音を愛さぬ者あらねど。籠へ入て飼ふ者を見ず。牛馬ハ食ゐ饜らはど食はもれを皆肥りゐつてゐれども。過分の荷を曳せること無きハ。真ゐ運好き畜生と云ふべし。而て穴當國ハ疆域ゐ割合して人員頗ゐ多く。後てまた食物の供給を要ること多し

と雖も。一反歩の地より一年の収納を聽けむ。米ハ三四十俵麦ハ五六十俵あり。また方一里の牧場ゐ一千尾餘の牛を育飼ゐと云ふ。此外總ての蔬菜果物ゐ至るまでゐの善こと謄の潰れるやうゐハ全く耕作培養の法ゐ宜き故あらんと思はまたり。話表何れの片鄙ゐ到るも避雷針を立てぬ家屋無く。避震器を蓄へぬ者無けれむ。雷災ゐ逢て怪我をもゐ者無く。地震の為ゐ潰れゐ家無し。こゝまハ甚だ安心と氣ゐ慰れむ意もゆつたり。そく〳〵細き呼ゐ目を注て瞻れむ言合さねど僉定規できめた如く極りよきこと。己ゐ勝手ゐ宵ッ張をゝく

朝寐坊をする者無く。夜遊る耽て午睡をする者無く。妾を蓄て鼻の下を延す治郎もなく。俳優小惚て現をぬかす女もなく。無性で掃除を嫌ひ裁縫をさせれば頭痛がすると云ひ。叱言を云へば怒寐をあ〜。間がな隙がなく鼻唄を謡ひ。寄ると集ると他人の悪評をあ〜。外出を好こて。買食を娯こと〜。夏ハ肌を脱て柄杓から水を呑ム。冬ハ巨燵ヨ寐這つく爪彈をするやうな阿婆摺女房や。良夫の不在ヨ酒を飲だり。管家手代と奸通たり。舅姑を邪摩ヨ仕たり。見世の銭を竊盗て臍操金を蓄たり。継子ヨ強顔あたつて酷使ふ上ヨ肩を敲うせ。脚を揉せて。己さへ心地宜れば他人の草臥ハ三年も耐つとつふ風で。やゝ敲きやうが弱の。それ揉そやうが拙手ぬと勝手ヨ戯言を並べヨ。舞臺旋つて夫婦差向ひの場ヨあれば。猫撫聲を発て能く良夫を蕩し。御為がらしをして己が身仕度をする女房も有ら。ぬ替ヨハ。米匱の瓦階つくヨ拘はず妻子を自家ヨ措たまい。先〜ら先と遊歩きたり。女房の辯舌ヨ乗て年老た母親を邪見ヨ仕たり。叱れる歟。撃れる歟と常時いぢ〜くしてゐる継子を無情節監仕たり。事の實否を糺しもせぬヨ女房の言ばよりヨ子供を取扱ふやうな白痴氣良夫一人も無く。又見様見真似

で爰ゟ稽古事と云ふと痛く[illegible]もあるやうゟ不精無性ゟ仕ゐ
がら。食物と歟遊戯事と歟云へバ二個返辞ぐ雀
躍をするやうゟ悪垂ゟ供や。主人の娘ゟ密夫を媒
妁仕たり。三度の茶ゞ粗品と云て郷近所へ觸廻るや
うゟ心得違の下婢も無く。人を猜む者ゟ。胡麻を摺
る者無く。また金銭ゟ困る者や愧を愧と思ハぬもの
有らぬ。娼妓ゟ身を賣る者ハ更ゟり。藝妓ゟある者
も無し。有然這所ゟ音曲ゟて人の遊興を幇けるゟ
と有らぬ歟と思へバ。自調器といふ長さ七八寸巾五寸
厚さ三寸程ゟ筥ありて。周囲の螺旋をいろ〳〵ゟ巻
けを琴。三味線。笛太鼓。笙の音あり。篳篥の聲あり。自

然と打出ゟ鼓の響。胡弓ゟ合て鳴渡る。何とも彼と
も云難き。美音を發ゟ調ゟの高下。合歟と思へハ
忽ち離れ。別れた音色復聚合る。巧ゟ工合ハ筆
ゟも盤せぬ。これを聞く者の心神を恍惚とさせること
と唯螺旋の加減ゟあり。これさへ驚くべき繹ゟる又
管鏡といふ不思議の鏡あり。こゝハ。觀やうと思ふ場
所へ管をかけて此方ゟ其鏡を据措けバ自家ゟ居
て數里隔たりし場所を在の隨觀ることを得る
より。少〳〵贅沢ゟ物の家ゟハ皆是を架ゟといふ
らと無し。前ゟも云ふが如く當国ゟハ金銭の爲ゟ春
を鬻ぐ娼妓や。三絃を抗とする藝妓が無きゟも拘

らず。男子ハ二十五歳以上女子ハ二十歳以上ならねバ結婚せる者も無く。また為る親も無し。是等ハ僉言合さねと一人として此習慣を破る者無きハ外國の者ゟ真似も出来ぬとて。瓜太郎ハ獨り点頭て感涙を流し。是ゟまた学校を觀るゟ大中小許多ある外ゟ各専門学校も十ゟ有て教員の試驗法ハ勿論教則整はずといふこと無れど。教師ゟして学力覚束なき者や品行善らぬ者なく。順つてまた生徒ゟ懶惰者や無勘辨る者有らねバ。休業日を樂して待遠しがつたり。月謝月俸を浪費込んで校長の機嫌を撰したり。牛店ゟ三十日拂ひ積りて矢の催促を受けたり。他家ゟ火災を面白がつて野地馬ゟ飛出し見物もるやうな不了簡の者無く。咸一心ゟ勉強せるが多ゟ當國ゟ限つて讀書のできぬ者ハ薬ゟ仕度もなし。新聞紙も盛大なるまど當国ゟハ物の相場と廣告と詩哥戯文の外別ゟ記載ること有らねバ専ら月の世界や金星銀星等の世界ゟ有りし綜を掲載るなり。これハ當國ゟ万里鏡とて長さ三間ゟ足らぬも能く千万億里の遠隔を繫ゟ顕はせ望遠鏡と。聽音器とく喇叭の像ゟて是亦千万億里遠隔の音聲を掌ゟ採るやうゟ聽取る器械有まバ外國の者が想像せるよりハ探訪せること至て易し。爰ゟ最も驚くべきハ近

年、殺明したるとふ百萬倍ゟ見せる顕微鏡あり。これを以て蚤ゟたる虱を見れバ大さ大象の如くして鴻鳳の如き翼有り。蜉蝣の羽虫を見れゞ大さ麒麟程あつて六足を具つ。蚤の睾丸ハ八畳敷ゟ余り。蚊の臑ハ立臼より太く見え。水中の蟲ハ大蜷ゟ如く。砂糖の蟲ハ馬の如し。噫恐ろしや俺國ゟどで水道の水ハ佳味と歟。鴨川ゟ水ハ清淨だと歟云つて漉も仕ないで呷々飲む者有るハ。有徒ことを知らねバなり。速く知らせて遣たや。何分便り ゟ仕様ハ無い歟。と瓜太郎ハ足元から鳥がたつやうふ思案ふくまし〳〵が。拙手の考休憩ゟ似るとや到底追付ユ風も出ぜ。便りゟ手掛りゟる術も無いハ異見の

紛仕舞。唯歎息ゟ外無り〳〵が。既ゟしてまた當國製造の時器を見るゟ是迄見た事も聞たことも無い程巧みふでもきて。置時器。柱時器の類ハ大概短きも一年長きハ三年五年ゟ一回巻けを濟ミ。懐中時器も皆半年巻。一年巻ゟれど十年二十年の間ゟ一秒の狂ひゟ〳〵。是等の器械を以て量ることゟれむ。天文學開けて百年二百年ハゟろ千年后の天變地異を表はせゟ。兼てまた精密ゟる晴雨儀ハ數日以后の風雨雷震を示せり。途中夕立ゟ逢て困る者無く。案外の晴天ゟ傘を供ゟ持つ者も無し。此外當國ゟまだも驚くべき大ユ事とふハ市街村落の地中ゟ鐵管を埋めて水道を便ゟ

こと有て。古代羅馬の水道あるとハ足元へも追付ぬ程
の大機也。水樋の修繕ハ往来を堀穿て車馬止をせ
るやうの事ハ何年よりも有ること無く。順つて市中水坊
の不便ハ一と云ふ。又孰れの家ハつて見ても絶ず清
水の滝ありて庭園の泉水ハ流れ。厨屋の瓶ハ落るよ
り。汲むといふこと無して水ハ常時瓶ハ溢れ。炊くこと
いふこと無して。湯ハ何時も釜ハ沸く。市中の洗湯ハま
た鐵管を曳て山間より天然の湯をよび。宅近邊て湯治
を自由ハされて這所ハ入る者頗る多きも。湯風呂流同
とも廣大ゞ上ハ外國と異て氣の利らぬ者無きゞ多ハ
水舟陸湯舟の傍ハ占座で他人の邪摩ハする者や。惜

氣ハ無く湯を汲で義理を欠る者や。柘榴口の中で唄を謠ふと
ゝ。口中ゞ臭く成らぬ呪だと云つて風呂の中で漱をする
やうハ白痴ハ一人も無く。又金魚ゞ有ると云つて小児を
湯へ入れる吐噓の親も無けれど。流板へ手拭ひて鯛ハ
形を形造へる悪戯子も無し。こゝハ退垢粉として一種
奇異な洗粉ありて。これを軀ハ塗て湯を洒げば手摺ず
して垢のおちる事。熱湯を雪ハそゝぐハ等し。此外料理
ハ仕法。菓子の製法。妙なれど甘きも歯ハ毒ならず。鹹き
も痛ハ障らず。何を聞ても彼を見ても。自由の達ぬこと
迚無く。何を食ても彼を試ても膳の潰きぬと云ふ粹
無し概して言へば當國ハ諸支咸整けずと云ふこと無

三圍の原ま
瓜太郎魅
きゝきたるを
怪しむ

く。人ゐ仁心深くして智識博く。禮義を厚くして道德を重ぜるまでば。僉聊も活業を懈らぎして自主自由ゐ幸福を得。自然の力ゐ打勝て自在ゐこれを使用まる土地あり。有然からゐ瓜太郎ハ追々居馴ゐ順ひ自由の達ゐ任して。春ハ遠足。夏ハ温泉ゐ日を弥り。思はず知らぞ長滞留。此地ゐ足掛三年と日數ゐまれで千日餘り。去るもの日々ゐ疎しとやら。今ハ故郷の日本さへ。忘れて何卒當國ゐ。生涯住んと白痴の一心某商會ゐ傭はれて。友ゐ連る日夜の勉強。性来嫌ひか勤務でも。朱ゐ交れで赤くあるとか。里諺ゐ云ふ門前の小僧習はぬけふが日迄。冗費を省いて蓄込だ。月ゐ僅ゐの給料も微

塵積った明家を地面ぐるみで買求め。曠夫ゐうぢより育ち。温順やうで容色美き女の方ゐら想けれて申込れし縁づくハ。實ゐ異ゐものと味もよき。閑た口への牡丹餅同様。嚙ぜ呑込む早速の相談。親き朋友の媒妁で。お濃衣と云へる美しき處女を娶ることゝなり。待つ身ゐあれで一日も三秋ほどの思ひして。漸く當日初夜過るころ婚禮の式果りて臥床ゐ入り。お濃衣を抱きて熟々容貌を更れで瞻るほど弥増愛敬。美きこと限あらねで。瓜太郎ハ已の女房であるがら恍惚とゝて稍見蕩るぞうり。軈て手を握り足ゐ觸り大く冷たきまでいざ温めて遣んと。それ手を採て胸懷へ差入れつ。足ハ俺太股の間ゐ措しつ。脊

撫であぐら。喃お濃衣よ夫婦ハ両身一體とやら。今日より
契る偕老同穴愧うゝい歟ハ知らねども。最早。親解たゞ宜
らうぞと撫下したる手觸りゞ異ま固いと氣ゞ付て熟々
賺れた女まハあらぜして。石地藏を逆ま抱きゐるま驚き。
偖ハ何したことやらと身辺を見れば。こまゐん隅田堤ゝ
傍ゐる三圍の原まして永き五ヶ国の漫游と想ひしハ魅
れたる一夜の中の妄像ゐる歟と。俺身でゞ身を怪こゐる
ゞら悄々亡ゞ茅舎ま立帰りて相憂らぜ負寃ま生計ゐるとゞ

総評

目下地球上ま開明の国ありや答へて曰く無しだゞ外
蠻國ま比べて開明ゝ名を下まと雖も。その實開明

ま達せんと進歩中の國ありのこ故ま今の開明ハ実
の開明まあらざるゐり。然りと雖も宇宙のことハ限
有ゞ如くまして其実限無し。無限ものま何とて達
まることを得べき。人の想像も復限有ゞ如く
まして其実限無し。無限ものを何とて望むこ
ゝを得ぬき。古今達し難き綜を著はし。望み難き
ことを示ま者ハ皆これを妖ま託す。是一ハ作者の器量
少くして其奥儀を究むること能ま不。一ハ見識狹ゝ
てその理由を解分ること能ハざるゞ故あり。此書の如き
も妖より出て妖を説く。またこれ作者の浅識ま由る
と雖も。凡古より世ま小説るものハ虚をいて実ゝ説

き。徒に古人を例に挙て著者の博識を示すもの多く有然れを讀む者唯人名字書をうると一般の利あるのみ。此書ハ然るあらず。元来戯作滑稽の物語るれバ憑る所皆不可思議を説きて作者自ら迷ふが如しと雖も。実を以て虚に渉る。其意味甚だ浅からず。夫狐太郎ハ父を白木恒右衛門とい ふハ白狐右衛門にして狐に縁あり。又母の名ハ犬に狐を抱せれば狐と云ふ狐馬に乗れば信ずる者無らん。不可信緯を信じ。可信緯を信ぜざる者ハ魅れたる者に非ずして又何とか云ふべきや。登始狐より出て狐となり中犬に離まて狐と

なり。今妻の濃衣を逆に抱く。是復ハ狐なり。有然ば求再合して狐となる。狐が魅れたるの歟。魅だ方が狐なるの歟。こゝを判断することハ甚難し。讀者能此書の意味を知ることあらば復魅るゝ氣配少からん

明治二十六年十二月廿六日印刷
明治二十七年一月二日發行

實價金四拾錢

著作者　岡本昆石

東京市日本橋區通四町目五番地
發行者　和田篤太郎

東京市京橋區采女町三拾一番地
印刷者　酒井留吉

東京市日本橋區通四町目五番地
發行所　春陽堂

版權
有
所